

## 〔論文〕二重敬語という言葉の重ね着をめぐって

### ——「校長先生」呼称における敬意の重層化と規範意識の変遷——

中村道広

#### 【要旨】

本稿では、教育現場で常態化している「校長先生」という呼称が、近年の「マナー言説」において「二重敬語（誤用）」と断罪される現象について、語彙史および規範意識の観点から再検討を行う。結論として、「校長」は職能を示す語であり、敬称としての「先生」を付加することは形態論上の二重敬語には当たらず、むしろ最高敬語の伝統を汲む「敬意の重層化」として正当化されるべき文化的事象であることを論証する。

#### 一、はじめに：問題の所在

現代の言語生活において、「校長先生」や「教頭先生」といった表現は、いわゆる「二重敬語」の典型例として槍玉に挙げられることが多い。生成 AI による回答を例にとれば、Gemini は「敬語の基本ルールに、『役職名（社長、校長、部長など）には、すでに敬意が含まれているため、後ろに「様」や「さん」をつけない』というものがあるから」と解説し、ChatGPT は「『校長 = すでに敬意を含む役職名』『先生 = 敬称（相手を敬う言い方）』というように、敬意を表す語が二つ重なっている」とのロジックを展開する。しかし、これら AI の回答は、語彙レベルでの「敬意」の重複を指摘するに留まり、言語学的な本質に踏み込んでいないとは言い難い。

学術的定義において、二重敬語とは本来、「お読みになられる」のように、一つの語に対して同一種類の敬語体系を二重に適用する事態を指す（文化審議会, 2007）。本稿では、語彙レベルでの「役職名＋敬称」の結合がいかんにして成立し、なぜ現代において「誤用」という言説が流布するに至ったのかを、歴史的背景に基づき考察する。

ただし、用例は長くても、基本一文を前提として引用することにつとめることとする。

## 二、「校長」の用語成立と法的地位

### 1) 学制発布期の呼称

明治5年(1872年)当初、学校の責任者は「首座」(註0:38P)の名称で呼ばれ、行政的機能としての「校長」は未分化であった(元兼, 1994)。当初、校長としての固有の機能・役割を担う必然性は希薄であったが、明治10年(1877年)頃には「校長」の呼称が使用され始める。

### 2) 管理統制の強化

明治14年(1881年)、自由民権運動への対抗措置として教員の管理体制が強化される中で、「校長」という職名が法的に定着した。元兼も、これを「自由民権運動の高まりのなかで教員に対する管理統制の強化策の一環」(註0:38P)として定着したと述べている。

### 3) 法的用語としての現在

「学校教育法」(註1:1947年)第60条等における「校長」は、あくまで組織上の職位を指す「普通名詞(職能名)」である。それ自体に対人的な待遇表現としての機能が完結しているわけではない。

### 4) 文学的実例と定着の過程

『日本国語大辞典』(註2)によれば、以下の用例が確認できる。

- ・ 坪内逍遙『当世書生気質』(1885～86年)六:「学校の評判はわるくなる。校長(カウチャウ)にやア呼つけられる」
- ・ 夏目漱石『吾輩は猫である』(1905～06年)七:「校長に依頼して免職して貰ふ事即ち是なり。免職になれば融通の利かぬ主人の事だから屹度路頭に迷ふに極ってる」

これらの用例に見られるように、三人称や客観的記述としての「校長」が先行しており、敬称としての「先生」を付帯させる慣習は、その後の教育現場における「親愛」と「権威」の融合過程で醸成されたと考えられる。事実、国立国会図書館デジタルコレクション(註3)所収の雑誌『新しい学校』(1954年)には、「校長先生へお願いします」というタイトルの文章があり、この時期には既に「校長先生」が確立していたことが明確にいえる。これは単なる言語学的誤用ではなく、校長が行政管理者であると同時に「教育者(師)」であるという側面の強調による産物であろう。

---

### 三、「先生」の通時的変遷と多義性

#### 1) 学識への敬意

『日本国語大辞典』(註2)によれば、『菅家文草』(900年頃)一の「寄巨先生乞画図」における「先生幸許<sub>二</sub>禁闈遊<sub>一</sub>、更恐時光不<sub>二</sub>暫留<sub>一</sub>」のように、「学者」としての意味が原義であった。その後、『六代勝事記』(1223～24年頃)には「ゆゑにいささか先生の徳失をのこし。おのづから後生の宦学をすすめむ事」とあり、「先に生まれた人。年長者」の意で使用された。さらに、小杉天外『魔風恋風』(1903年)の「受持医(センセイ)がお帰りになったさうですから」のように、専門家・指導者への敬称として定着した。

#### 2) 教育者への純化と卑俗化

近世以降、『譬喩尽』(1786年)に「先生古より師匠の号とす」、『続々鳩翁道話』(1838年)に「お医者さまにも成らず、先生にもならず、又御出家にもならず」とあるように、「師匠の号」として定着する。一方で、江戸の戯作『浮世床』に「戻駕を語る所が。先生(センセイ)よめねへときてあるから」、談義本『風流志道軒伝』(1763年)に「謹んで先生の教を受(う)く」、雑俳『柳多留』(1765年)に「先生と呼んで灰ふき捨させる」とあるように、からかいや軽蔑の対象としての側面も生じている。また、『燕石雑誌』(1811年)には「大人先生附」「先生と稱し、大人と稱す」とあり、「大人に優れりと思へり」という記述から、「大人(うし)」という語に「優れた」という意味合いが加わった端緒が江戸時代にあることがわかる。

#### 3) 現代的用法

明治期以降(本稿の定義における現代I)、『日本教育令』(1879年)の「第五八章 小學校員タラント」(註4:16P)に見られる「教員」や、その後の「教諭」(学校教育法)という職名に対し、「先生」という呼称・敬称が役割分担として成立した。

---

### 四、「二重敬語」規範の拡大解釈と誤謬の構造

#### 1) 文化審議会の定義と俗世間の解釈

文化審議会答申「敬語の指針」(註5:2007年)が定義する「二重敬語」は、助動詞や接辞の重複を対象としている。専門書『日本文法大辞典』(註8)や『国語教育研究大辞典』

(註9)、『敬語講座 敬語用法辞典』(註10)にも記載がない。CiNii(註7)の検索結果を精査しても、語彙レベルでの「役職名＋敬称」を二重敬語とする記述は存在しない。

しかし、ネット掲示板等では以下のような言説が流布している。

- ・ チームシンヤ(註11):「校長先生という言い方は、校長(役職)＋先生(敬称)、つまりどちらも敬意を表す言葉であるため、二重敬語になるのです」
- ・ 発言小町(註12):「二重の敬称で、ヘンテコな印象です。トピ主さんが初めに書かれていたものが正しいと思います」

これらはマナー言説において、「敬意の重なり＝悪」という単純化された数式が受容され、語彙レベルにまで拡大解釈された結果である。

## 2) 敬称複合語としての正当性

「校長先生」は、言語学的には「役職名＋敬称」という構造を持つ「敬称複合語」である。「学長先生」「園長先生」「弁護士先生」が可能であるのと同様、職位を示す語に、対象の人間性を敬う語を添える行為に論理的矛盾はない。「医師先生」と言わない例についても、専門性(整形外科の先生等)への細分化の可否が関わっており、役職名そのものの自立性と敬称の付加は別次元の問題である。

## 3) 最高敬語の系譜

平安時代、「せ給ふ」のような二重敬語は「最高敬語」として高い敬意を表す正統な表現であった。敬意が対象の地位に応じて重層化するの、日本語の待遇表現の本質的特徴である。昨今、Quora(註13)等において「『おーになられる』という必要はないと書かれています、誤用とは言っていません。マナー業界の陰謀でしょうか？」といった疑問が提示されているが、これは極めて本質的である。近世文学に見られる「先生」の卑俗化は、敬語の裏表一体の性質を示す。学者がこれを「不当に高い尊敬語」として拒絶したのは、日本の文化に培われた「最高敬語」の豊かさを知らないがゆえの誤謬ではないか。立場が上であればあるほど言葉が重層化するの、日本語の歴史的必然である。

---

## 五、結語

「校長先生」という表現は、単なる言語学的な誤用ではない。それは、校長が「行政管理者」であると同時に「生涯を教育に捧げる師(先生)」であるという、日本の学校文化が育ん

だ敬意の表れである。一部の学識者やマナー教育者が提唱する「二重敬語＝誤用論」は、敬語の歴史的・社会的な豊かさを剥ぎ取る「言葉の脱色」に近い。社会が長年許容し、必要としてきた呼称を、一元的なルールで裁くことは、言語の実態を見失う危険を孕んでいる。

〔引用文献〕

- 註0 九州大学「教育経営 教育行政学研究紀要」1994年第1号 37-50  
元兼正浩「明治期における小学校長の法的地位の変遷に関する一考察」
- 註1 「E-GOV(法令検索)」参照日:2026年2月1日(昭和二十二年法第二十六号)  
[https://laws.e-gov.go.jp/law/322AC0000000026#Mp-Ch\\_5](https://laws.e-gov.go.jp/law/322AC0000000026#Mp-Ch_5)
- 註2 小学館編『精選版日本国語大辞典』小学館 2006年1月1日  
①1913P・②1019P  
小学館編『日本国語大辞典』小学館 <https://japanknowledge.com/>
- 註3 国立国会図書館デジタルコレクション・新しい学校・新しい学校 6(11),  
51-54, 1954-11・東京:興文館 <https://dl.ndl.go.jp/pid/11182834/1/2>  
参照日:2026年2月1日
- 註4 公文図書館  
**[公文録・明治十二年・第百十三巻・明治十二年七月～九月・文部省](https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M00000000000000126640)**  
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M00000000000000126640>
- 註5 文化庁「文化審議会答申」「敬語の指針」(平成19年:2007年:2月2日)  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo\\_tosin.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf)
- 註6 甲南大学教職教員センター・佐伯暁子「使用実態に基づく敬語の指導について—中学校国語教科書の分析を踏まえて」2024 27-36, 2025-02-28  
<https://konan-u.repo.nii.ac.jp/records/2000717>
- 註7 「国立情報学研究所」(CiNii)参照日:2026年2月1日  
<https://cir.nii.ac.jp/all?q=%E4%BA%8C%E9%87%8D%E6%95%AC%E8%AA%9E>
- 註8 松村明編『日本文法大辞典』明治書院 昭和46年10月15日・189P  
平成6年1月20日
- 註9 国語研究所編『国語教育研究大辞典』明治図書 1991年7月 233P
- 註10 林四郎 南不二男編『敬語講座 敬語用法辞典』明治図書 1974年
- 註11 チームシンヤ「校長先生・教頭先生の呼び方は、二重敬語で間違いで失礼?!」2025年1月13日 00:30 参照日:2026年2月1日  
<https://note.com/teachershinya/n/ne6436efef8b0>
- 註12 「発言小町」(レインボー)2007年04月08日 22:27 参照日:2026年2月1日

<https://komachi.yomiuri.co.jp/topics/id/125832/>

註13 前田せいめい 参照日:2026年2月1日

「二重敬語は、いつから誤用/失礼になったのですか？昭和27年のこれからの敬語では、『「おーになられる」という必要はない』と書かれていますが、誤用とは言っていません。マナー業界の陰謀でしょうか？」

<https://jp.quora.com/%E4%BA%8C%E9%87%8D%E6%95%AC%E8%AA%9E%E3%81%AF-%E3%81%84%E3%81%A4%E3%81%8B%E3%82%89%E8%AA%A4%E7%94%A8-%E5%A4%B1%E7%A4%BC%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%81%AE%E3%81%A7%E3%81%99%E3%81%8B-%E6%98%AD%E5%92%8C27>